

創設期の厚生経済学の一側面

—— ピグーと優生思想* ——

山 崎 聡

19世紀の後半に誕生し、20世紀の幕開けと共に興隆した優生学は、当時のイギリスの政治的思考において支配的であった国民的効率を追求したものと看做することができる。当時の多くの優生学者らは、寛容な政府による援助と多くの誤った慈善事業の存在に対して憂慮した。彼らの主張によれば、それらが合わさって「逆選択」(人口比悪化と国力衰退)が生じる状況を生み出してきた。これらの優生学的主張は、貧者への分配を改善しようとするピグー厚生経済学の精神とは真っ向から対立するものであった。ピグーは、自身の確固とした倫理的見地から優生学に内在するイデオロギーを看破し、優生学的批判から福祉政策を理論的に擁護した。1930年代頃までに、優生学自体も環境を重視する改良型優生学へと変わっていくなど、厚生経済学(福祉政策)に対する風当たりは穏やかになったが、初期の最も風当たりが厳しい時期にその正当性を主張したのはピグーのみであったといえよう。

JEL Classification Codes: A12, B13, I31

1. はじめに

19世紀の後半に誕生し、20世紀の幕開けと共に興隆した優生学は、人間の遺伝的形質に着目し、断種・隔離・結婚政策を通じて人間の質を改善もしくは質の墮落の阻止を目指した立場として理解されている。また当時のイギリスにおいて、優生学は政治的思考において支配的であった国民的効率を追求したものとして看做された¹⁾。優生学者らは、「寛容な政府による援助と多くの誤った慈善事業の存在に対して憂慮した。(彼らの主張によれば)それらが合わさって『逆選択』が生じる状況を生み出してきた。そこにおいては、病的、寄生的、そして様々な種類の無能な人間たちに…快適な生存が保証された」(Searle 1976, 45-6)。特に、優生学の旗手であるピアソンは、貧者や弱者に加担する福祉・慈善政策に対して激しく反対していた。

ピグー自身も次のように認識していた。「現在最も流行している、社会改良を促進する試みは、…無益というだけでなく、有害でさえあるといわれている。その理由は、そのような試みによって、…先天的形質に内包される根本的な部分を間接的に阻害してしまうからである。バ

ニット氏によれば、現在の我々の試みは、大局的にいって、より不適な者の生活水準を向上させている」(Pigou 1907, 366)。

以下で述べるように、こうした優生学的主張は、貧者への分配を改善しようとするピグー厚生経済学の精神とは真っ向から対立するものであった。故に、ピグーの思想を考察する上で、優生学の問題は避けて通ることはできないものである。だが、この課題は何もピグーだけに固有なものではない。何らかの「福祉政策」を推奨する全ての経済学者は、この問題から無縁ではあり得ない。この点に関して、シュンペーターによる次の指摘が注目に値する。「生物学的研究の結論を社会現象に応用することは、この期間の思想の中にあまりにも大きく表出していたので、これを全く無視するわけにはいかない」。だが、「この議論に関して、二点を遺憾ながら指摘しなければならない。経済学者はこれらの問題に対し、当然に値する程の注意を全く払い得なかった。それへの賛否についての口の軽いスローガンだけが彼らの貢献の大部分だった。これらよりも多くの心労を重ねた唯一の指導的人物はピグーのみであり、より多くの情報を得ようと願う読者に対し、私は彼の名を挙げ

たい。以上に述べたことよりも、さらに不味いのは、この説を支持する場合において、経済学者たちが悲しむべき程度にイデオロギー的偏見を露呈したことであった」(Schumpeter 1954, 788-90. 傍点引用者)²⁾。レナード・ダーウィンですら、次のように評している。「私が知る限りにおいて、[ピグーは]経済学との関連における優生学に対して真剣に刮目した殆ど唯一の経済学者である」(Darwin 1916, 311)。

経済学に対する優生学の影響を考察したパート&レヴィによれば、ゴルトンやピアソンの優生学的文献の重要性が、経済思想研究の文献において無視されてきたことは奇妙である。例えば「アメリカの優生運動に対するアーヴィング・フィッシャーの長く熱心なサポートは、殆どの経済思想の標準的な歴史において語られることはない」(Aldrich 1975, 33)。つまり、経済学史研究において、優生学の問題がまともに扱われたことは非常に少なかったのである(Peart and Levy 2003, 262)。以上のような状況から、本小論では、ピグーと優生学の問題を考察する。当時の背景を概観した上で、ピグーの議論を論理的に再構成し、優生学サイドからの攻撃と如何に渡り合ったかを精察する。先のシュンペーターの指摘を敷衍しつつ、創設期の厚生経済学の一側面に光を当てたい。

2. 背景：優生(教育)協会 ケンブリッジ優生協会 知的障害者保護協会

優生教育協会は、1907年に設立された(26年に優生協会と改称)。当然、世間に対して、優生的問題の存在を知らしめることが主目的であった。ケンブリッジで数学を修得したゴルトン(チャールズ・ダーウィンの従兄弟)が初代会長に選任された。ダーウィンの末息子レナードが1911年に会長に就任している。初期の評議会メンバーの多くは、ケンブリッジ大学教員(ウェサム、イング、レギウスなど)であった。

1909年、ケンブリッジに入学した統計学者R. A. フィッシャー(1952年ナイト爵)は、ピアソンの文献に啓発され、進化と遺伝学の数学に興味を持つようになる。論文「社会的強者繁殖

という優生学的目標」によってフィッシャーは、1911年3月、優生協会のケンブリッジ支部設立へと邁進する³⁾。彼は、同支部を結成しようとした時、既に本部会員であったイング、パニット、ウェサムらケンブリッジマンに接近した。アルバート・スワードとケインズは支部の会計官になった。同支部には多くの優れた大学人が加わった(上記のイング、パニット、ウェサムらは幹部、理事として参画した)。多くは、科学者で、少数の医学者、一人か二人の経済学者、文学者であった。ケインズに関していえば、初期の段階で、単なる会員ではなく、会計官まで買って出たことは、彼の只ならぬ関心を示唆するものといえよう。また、彼は、1937年~44年の間、ロンドン本部の理事メンバーにもなっていた(37年には副会長)。37年にはゴルトン・レクチャーを行っている。

同支部では、度々公式のミーティングが開催され、イング、パニット、レナード・ダーウィンなどが講演を行っている。それらの論調としては、「有能な女性ほど独身であるのに対して劣等な者は奔放に結婚・再生産」、「イギリスにおける人種的墮落を食い止める優生学」、「貧困層がより不適格者を生み出すこと、そして多産であること」(Darwin 1912, 26-38)。特に、メンデルリストのパニットは、下層階級を教育するのではなく、自分たちの階級(ミドル)こそが再生産という武器を行使し、下層階級に対抗すべきことを説いていた(積極的優生学の強調)。これらのレクチャーは盛況であり、殆ど批判も出なかったとされる。

フィッシャーがケンブリッジにいる間は、彼の活躍により、ケンブリッジ支部は繁栄した。彼は、積極的優生思想家であり、下層階級の繁殖阻止よりも、上層階級の再生産を推奨した(これがそのままケンブリッジ支部を性格づけたといえる)。彼が一時ケンブリッジを離れると、同支部は勢いを失い、一時閉鎖となった(もう一つの理由は第一次大戦)。その後、30年に再興するも結局は、33年暮れ辺りを最後に、同支部は事実上閉鎖となる。理由としては、資金難、優生学自体の思想的揺らぎもあった。

ケンブリッジの幾人かの科学者たちは、優生教育協会(ケンブリッジ支部にも)には属さなかった。筆頭に挙げられるのは、統計学者ピアソンであろう。彼は、支部設立前にケンブリッジを去っている。意外なことに、ベートソン(パニットの師)も参加していない。メンデルイズムの立場にあった彼であったが、優生学自体への関心は薄かったとされている。また、ピグーとケインズが仲介して統計学講師になった(1912年)ユールもまた同様であった。彼は、ケンブリッジでピアソンに学び、貧困層の幼少疾病の原因に関する研究を行った。そして、ピグーも所属しなかった。

なお、優生教育協会とも関連を持った団体の一つに全英知的障害者保護協会(National Association for the Care and Protection of Feeble Minded: 1896 年設立)がある。同協会は、1908 年に立ち上げられた知的障害者の保護と管理に関する王立委員会(Royal Commission on the Care and Control of the Feeble Minded)にも委員を送っている(後者の幹事は慈善組織協会のロック)。後者の調査会は、翌 09 年に(優生教育協会と合同で)報告書(*The Problem of the Feeble-minded: An Abstract of the Report of the Royal Commission on the Care and Control of the Feeble-minded*)を作成しているが、ピグーはこれにコミットしているのである。ピグーの報告書タイトルは「当該問題の経済的側面」(1909)であった。実は、ピグーはこの点に関して継続して関心を保っている。何となれば、同王立委員会の勧めで 1908 年に設立された「精神障害に関するケンブリッジ協会 Cambridge Association for the Feeble Minded」(ダーウィンの末息子の妻が設立者)のアドバイザーを務めていたからである。ちなみに、ベートソンもピグーと同様にアドバイザーとして参画した。ピグーは、パニットや R. H. ロックに対しては批判的だが、ベートソンにはそうでもない。上記のケンブリッジ支部の委員会メンバーの半数以上は、女性であり、その多くは一般市民であった。

ケンブリッジ優生協会は非常にアカデミック

なソサエティであった。初期の会員は全て大学関係者であった。加えて、ケンブリッジ支部は、入会の選別を評議会が決定しており、閉鎖的な性格が強かったとも考えられる。そのような一種のエリート主義(上述のように、組織者を筆頭に、積極的優生学のカラー)に満ちていたため、一般市民には近寄り難かったようである。これは、先の(ピグーやベートソンも所属した)知的障害者支援協会の雰囲気(学者も一般市民も女性も参加)とは異なるものであった。

3. ピグーにおける科学と倫理

ピグー自身も述べているように、この時期に生物学の知識が飛躍した。そして、ベートソンや他の生物学者たちの学究を通じて、諸法則は、それまでは扱いが困難であった多くの問題に対して効果的に援用された。その過程を叙述した著名な文献として、ピグーは、パニットと R. H. ロックの著書を挙げる(Pigou 1907, 358)。

従来は「根本的な生物学上の属性によって定められる国民の質に対して経済的原因が与える反作用については、問題が起こされなかった。今では事態は異なっている。生物学者及び遺伝学者は共に社会学に注意を向け、遺伝の法則を適切に理解することが我々の学問にとって根本的に重要であると主張している。そのいうところによれば、経済学者は…その精力を浪費している」(Pigou 1932, 106)。パニットによれば、典型的な政治家にとっての万能薬と思いき衛生と教育は、精々その場凌ぎに過ぎない。恒久的な発展は、教育ではなく育種の問題であり、配偶子の問題であると主張される。(理論的相違はあれど)実践的な側面においては、実質的にピアソンの論調と一致する(Pigou 1907, 358)。

以上のような論調、批判に対して、ピグーは「今や科学者たちによって表明された指令的な幾つかの意見は、間違いなく興味深く、また慎重な配慮を要する」(Pigou 1907, 359)と述べる。だが、そこで重要となってくることは、生物・優生学(つまり科学的知見)に対する学問(方法)的視座である。曰く「学問の権威に対する壮大な相違に対して注意することが望ましい」(Pi-

gou 1907, 359). 確かにある分野では、優生学者は教師であるが、他の分野では、彼は単なる生徒であるとピグーはいう。ピグーによると、優生学者が社会問題に対して生物学の知識を適用しようとする時は、彼は前者でなく、後者の立場に立っているのである。というのも、生物学が問題解決に対してある重要な知識・データを提供するのであるが、重要度において勝るとも劣らない重要な他の知識も存在するからである。したがって、それらデータを総合し、互いに関連づけ、政治的見識のためのガイダンスを提供する責任は、生物学者にではなく、社会学者に存するのである(Pigou 1907, 359)。これは、翌年の就任講演の「経済学は倫理学の侍女」と全く同じことを意味している。社会改良の方途を模索することは、目的と手段との複合的な問題を伴う。それは次の問題を共に含む、どのような社会が善であるかという問題と、どのような手段によって意図された目的(望ましい社会)が効率良く達成されるかという問題である。前者の問題は完全に倫理的なものである。それは専ら価値判断に依存する。どのような実証科学(例えば経済学、化学、物理学、生物学、…)であれ、価値判断には些かも貢献しない。実証科学は、所与の条件の下でどのような結果が生じるかを明らかにするのであり、どんな結果が善であるかを示すものではない。社会改良者が生物学を援用する前段階において、彼は全く異なった根拠・論理に基づいて何を目的とすべきかを決定していなくてはならない。優生学が社会改良者に提供する知識は必然的に手段に関するものに限定されることをピグーは明言する(Pigou 1907, 359)。

ここにおいて、ムアによる試金石、すなわち
事実判断と価値判断との論理的相違に対する無
反省を振り出した「自然主義的誤謬」(ムアによ
ればスペンサーなどが犯したもの)をピグーが
慎重に回避しようとしていることが明瞭に見て
取れる⁴⁾。進化論、生物学といった科学的知見
は事物や事象の生成過程や実態を叙述するもの
ではあっても、我々の倫理的判断を正当化したり
根拠づけたりはし得ないというメタ倫理的

な議論をピグーは十分に把握している。当時の一流の生物学者や優生学者たちですらも、ともすれば陥っていたこの誤謬をピグーが看破していたことは注目に値する。ムアの『倫理学原理』(Moore 1903)の影響力やそれへのピグー自身の言及(Pigou 1908a; 1912)から省みても、ムアからの影響は小さくはないと推測できよう。

では、ピグーは目的たる「善なる社会」をどのように考えているのだろうか。「優生学と賃金に関する諸問題」(1923b)⁵⁾に注目しよう。「我々が目指すものは、可能な限りの内在的に最も善い状態にある社会である。内在的に善である素質を持った人々を含む社会である。幸福な人々である——幸福は一つの内在的善であるからである。彼らの相互関係は、親密で友好的である——何となれば、共感は明らかにいっそう善であるものの一つだからである」(Pigou 1923b, 81)。

また上記の目的と手段との関係については、ピグーは改めて次のように説明する(Pigou 1923b, 80)。ある素質が善であると我々が述べる時、二つの異なったものにそれぞれ言及している。ある時は、質が内在的に、究極的に善であるといい、またある時は、内在的善を効果的に促進する手段として善いという。「〔例えば〕広い心、誠実、非利己性、…、生における熱心さ、目的追求の熱心さ」のようなものがある。その一方で、「鋭敏な知性、鍛えられた力、どんな目標でも成し遂げる超人的能率…」などがある。前者はそれ自身における善であり、世界の倫理的王冠の星であるとピグーはいう(非経済的厚生)。後者は、「それ自身において」という意味での善ではないかもしれないが、別の意味においては善となる。それは、内在的善の手段としての善である(Pigou 1923b, 80-1)。もっともこの区別は、目的論者であるピグーが初期(Pigou 1908a)から一貫して保持していた。

内在的価値と手段的価値との関係から、後者に幾分か的重要性や有用性が認められるのは、それが前者を実現する効驗を有するからであって(Pigou 1923b, 81-2)。そうでなければ、後者自体に意義は存さない。もちろん、ある価値を

実現する実践的な手段が当該の価値との関係においてあまりに密接であるが故に、あたかも手段自体に内在的価値が付されるかのように見える「手段の目的化」が生じてくることは想像に難くないが、目的－手段の関係が解消してしまうわけではない。よって、手段的価値を偏重することで、本来の目的である内在的価値が阻害されることはあってはならないことになる。

ピグーは、生物学的知見(獲得形質遺伝の否定など)に関して社会学者は何も発言する資格はないという。しかしながら、生物学者・優生学者たちが、恒常的な発展(progress)は配偶子と育種の問題であり、それ以外のものをもってはあり得ないとまで言明する時、彼らは哲学一般の領域にまで踏み込んでしまっているとピグーは警告する。「中心点はこれである。生物学者が先祖の環境如何によっては改変不可能だと主張した事柄は、発展という観念が適用される事柄とは異なるものである」(Pigou 1907, 361)。次世代の持って生まれる特質はそれを形成する配偶子の性質によって決定される。しかし、ピグーは、社会改良者が目指す善さとは具体的な男女の善良さ(つまりは厚生)であり、持って生まれた特質のそれではないと断言する(Pigou 1907, 361)。

ここでいわれる発展とは、明らかに評価言語として用いられている。つまり、ピグーによれば、生物学者や優生学者たちは、遺伝的特質の卓越性こそが増進すべき唯一の価値であると看做しているというのである。だが、このコンテキストにおける遺伝的特質の卓越性とは何であろうか。それは、大体において先にピグーが示した「鋭敏な知性、鍛えられた力、どんな目標でも成し遂げる超人的能率…」という類のものである。要は、優生思想の規準では、「健康で知的、体力的に優れていること」が善だと看做されているということである。「優生学の聖者として祭り上げられたフランシス・ゴルトンが考えたのと同様、優生主義者たちは、人間は人間たるに相応しい特性と彼らが考えたものを備えるべきだと信じた。その特性とは、学校や大学あるいは専門学校で培われ成長していく才能

である。彼らは、知能、それも高等教育で培われた知能を最大の人間の美德と看做す傾向があった」(Kevles 1985, 76-7)。ここではっきりと確認すべきことは、優生学者たちが明示的であれ暗黙裡であれ掲げる卓越性の規準(美德)は、科学から導き出されたものではなく、科学的知見とは独立に外挿されているに過ぎないということである⁶⁾。上記の規準は、優生学者個人の価値判断、またはある特定の社会階層で一般的であった価値観⁷⁾から殆ど無反省に引き出されたものであって、先のムアの試金石を何らクリアしたものでもない。

ムアの試金石とは、科学的知見という事実判断から何が望ましい対象かという価値判断を論理的に導くことが誤りであるという「自然主義的誤謬」であった。C.ダーウィン、スペンサー、またゴルトンやピアソンに代表される当時の優生学者たちの殆どがこの誤謬から無縁ではなかったとされる⁸⁾。ピグー自身は、ムアと同様、究極的善に関する判断は総合判断であることから直覚によって判断する他はないという直覚主義の立場にあった(Pigou 1908a; 1912)。しかしながら、その直覚による判断が客観的に正しいと保証されるわけではない。先に挙げたピグーの「広い心、誠実、非利己性、…、生における熱心さ、目的追求の熱心さ」や「幸福」といったもの(何れもピグーのいう厚生の一部)が内在的善であるという根拠は、ピグーにおいては直覚的判断によるものであって、確かに異を唱えることもできよう。だが、少なくとも、ピグーに限っていえば、生物学的知見から無反省に規準を導き出した、あるいは、そういった知見とは独立に価値規準を持ち出してきたことに対して無自覚であった優生学者たちよりも、また(シュンペーター曰く)「悲しむべき程度にイデオロギー的偏見を露呈した」経済学者たちよりも哲学的に洗練されていたと評価することができる。優生学者が持ち出した卓越性の規準(体力、知力)は、ピグーの判断によれば内在的な目的ではなく手段に過ぎない。手段(優生学)を偏重するあまり、本来の目的(内在的善)が見失われる本末転倒に対してピグーは用心し、そ

れが優生学に対するピグーの基本的なスタンスとなっている。

問題は、優生主義者たちの価値論(彼らが考える卓越性の規準)がイデオロギー的色彩を強く帯びていることである。繰り返しになるが、その原因は、慎重な倫理学的反省が希薄なことである。具体的には、科学と倫理との論理的相違(ムアの試金石)に対する無反省(メタ倫理学レベル)と指定した卓越性の規準(価値論)の吟味に対する無反省(規範倫理学レベル)である。換言すれば、知力・体力という卓越性の規準のみを目的とし、その他の諸価値を目的から捨象するイデオロギー的な価値論を優生主義者たちは想定していたのである。

4. 功利主義者は反優生思想か？

ハンキンスによれば、優生学者たち——生物学者や社会学者らも同様——は、19世紀の功利主義的経済学者に対してあからさまに反対する態度を取った。何となれば、ある者の幸福は他者のそれと同等だからである(Hankins 1923, 398, 410)。だが、これはあまり説得的でないように思われる。例えば、ジェヴォンズはレイシストであったとされる(Peart and Levy 2003, 275-8)。また、エッジワースも優生思想(貴族制的功利主義)を持っていた(上宮 2007, 79)。先のハンキンスの指摘は、功利主義の構成原理の一つである「合理的仁愛の原理」⁹⁾を指しているが、これが本当に反レイシストを含意するかどうか疑問が残る(アングロサクソンや上層階級ないしミドルクラスに限って、彼らの幸福を量に応じて公平にウェイト付ける、と解釈すれば良いだけのこと)。

これに関してピグーは次のようにいっている。「市民のあるグループの厚生が他のグループのそれよりも上位にランクされ得るという時代は過去のものとなった」(Pigou 1947, 43)。すなわち、上層階級の人々の厚生も労働者階級の厚生も(互いに量において等しければ)同じ重みを持つもの(価値)として扱われなければならない。ピグーによれば、両者の厚生は等しく実現に値する目的なのである。

加えて、次のピグーの例証も優生学の議論には示唆的である。多くの人は、クラシックコンサートと乱痴気騒ぎとであれば、前者に出費することのほうが望ましいと考える。しかしながら、ある人物がいて、彼はコンサートが大嫌いな一方で乱痴気騒ぎを好むが、それでも、コンサートに出費することのほうが彼にとってより善いと断言できるであろうか。ピグーは次のように答えている(Pigou 1922, 7)。もし、個人が、乱痴気騒ぎが悪であり、コンサートは善だと予め自覚していないとしたならば、彼が乱痴気騒ぎを選好することは善である(だが、もし上記の自覚がありながらも、乱痴気騒ぎを選好したとすれば、それは悪となる)。ピグーの見解によれば、一般的にはコンサートのほうがより善いのであるが、当人の自覚次第では(一般的にはより劣ると看做される)乱痴気騒ぎを選好することが善いとされるのである。一般的に認められているという意味で前者を客観的価値だと看做すならば、後者は主観的価値だといって差し支えない。だが、その上でもなお個人が自己の選好を堅持しようとするならば、それを善だと認めてやるということである。

これは、優生思想に対して、かなり強烈なメッセージを含んでいるように思われる。ピグーの主張を突き詰めれば、社会は、ある個人が「劣等」であろうとなかろうと、優生学的に望ましくであろうとなかろうと、その者が主観的に満足を楽しんでいるのであれば、それを尊重しなくてはならないことになる。極端に言えば、ミルがいう「ソクラテス」も「満足した豚」も双方尊重されなくてはならないことを含意する。価値とは(主観的)幸福ではなく、人格(卓越)だということになれば、(その意味で)劣等な人種の存在に対して風当たりが厳しくなろう。だが、多元的な価値を認め、インテリから見てどうであれ、本人の主観的な欲求充足も善として尊重する必要があると考えたピグーのこの点は確かに注目して良いのではないだろうか。

5. 福祉政策：「環境は子供を持つ」

当時の主流的な優生学的思想についてピグー

は次のように述べている。「…生物学の証明するところによると、我々がここ[厚生経済学]で追求しているような研究が全てつまらぬもので、方向を誤っているという見解」(Pigou 1932, 110)がある。ピグーの掲げた三つの命題(増大・平等・安定)は、結局は環境変化を通じたものであるが、環境は少しも重要ではない。何となれば、環境の改善は、それを享受する人々の遺伝的形質には作用し得ないからである。パニットによれば、環境と衛生は「精々一時凌ぎ」に過ぎず、教育よりも血統、鍛錬よりも配偶子なのである(Punnett 1910, 80-1)。ピグーによれば、ロックも同見解で、実質的にはピアソンも同様である(Pigou 1912, 56)。そのような見解が依拠する科学的根拠は、環境の影響による獲得形質は遺伝され得ないという知見である。

この問題は、部分的には、ラマルク流の獲得形質遺伝の問題に依拠することになるが、当時の支配的な見解によれば、同種の後裔を究極的に形作る生殖細胞は、同種の体を形成する細胞とは初めから全く異なっているという。これに関しては、ヴァイスマンの説が著名である(Searle 1976, 6)。遺伝を親の体から子の体へと起こるものと看做すのは真理に反する。子は親の生殖細胞から遺伝を受けるのであって、親の体からではない。そして、生殖細胞は、その性質を、それを保持する体ではなく、先存する同種の血統に負っている。したがって、体はいわば生殖細胞の副産物である。遺伝に関する限り、体は、次世代のために保存される生殖細胞の単なる運搬人に過ぎないとされる。仮にこれが妥当であれば、生殖細胞内の一定の実体と構造の存在によって決定される組織の確定的な特質は、祖先の環境によっては直接的に影響を受けないことになる。ただ不確定な量的な類の性質のみが(環境による)影響を受ける。生物学者の間での支配的な見解によれば、後者による性質は取るに足らないものと看做される。それ故、個人が自己の人生において如何なるメリットを獲得したとしても、それは彼の死と共に消滅する運命にあり、子孫には遺伝しない。こうした

命題からは幾つかの実践的な命題が導かれた。優生学者は、この命題を用いて、教育、環境に関連する社会改革一般を批判した(Searle 1976, 46-7)¹⁰⁾。畢竟、「育ち」は「氏」に敵わないという主張である(Punnett 1910, 81)。

上でも述べたように、生物学的事実(判断)の側面に関しては社会学者には発言する資格は基本的にないとピグーは考える。獲得形質が遺伝しようとしまいと、それが法則的事実である限り、門外漢が口を挟むことはできない。だが、彼は、「この生物学上の前提を承認する。しかしながら、その社会学的結論に対しては異議を唱える」(Pigou 1932 112-3)といい、以下に述べるような大胆な着想を示す。

環境的要因は直接・間接的に人々に作用する。ある存在によって実際に享受されている現行の環境は、一時的には(パニットがいう「その場凌ぎ」)、その存在の生得的特質と協力してその存在の質を形成する。これは優生学者も認めるところである。それを逆手に取ってピグーはいう。「一世代の環境はある永続的結果を生むことができる。何となれば、それは将来世代の環境に影響し得るからである。要するに環境は人々と同様に子供を持つのである。教育その他のものは、物質的世界においては新生児に影響を与えることはできないが、観念の世界においては影響を与えることができる。そして、観念が特定の世代によって一度作られるか、承認されると、それが機械的発明の中に具現化される、されないに拘わらず、続く世代が享受する環境をその根底そのものから変えるだけでなく、またさらに前進するための道をも開き得るものである。何故かという、新しい人はそれぞれその最後の祖先が始めたところから始めなければならないのに対して、新しい発明はそれぞれ最後の祖先が残し去ったところから始めるからである。このようにして、環境は永続的、あるいはむしろ前進的に変えられていく。そして、環境はそれに現実に支配されている人々に対して明らかに重要な影響を与え得るから、以上の変化は持続的な結果を生み出すことができる」(Pigou 1932, 113-4. 傍点引用者)。

ピグーは、環境改善には意味がないとする優生学者の主張は極端に失うと考える。恒常的のみならず累積的な発展も、繁殖と生殖細胞に全く関係のない社会改良の手段によって実現できるというのである。環境を通じて、個人が如何なるメリットを獲得したとしても、死と共に消滅する定めにあり、子孫には遺伝しないという優生学的見解(ヴァイスマン学説)を認めることはピグーにとって何ら痛手ではない。環境は持続的、累積的に後代に伝達されるので、それが各世代の諸個人に与えるメリットは生物学的に遺伝されなくとも、事実上は世代を超えて持続されるものとなり得る(環境は子供を持つ)からである。

このピグーの考え方は、当時の「氏－育ち Nature/Nurture 論争」(Searle 1976, 52)に一石を投じるものであるといえよう。優生主義者にも、無論、様々な見解を取る論者が存在しており、例えば、レナード・ダーウィンなどは、氏と育ちを農業における肥料と耕作に準え、双方が必要であるという比較的穏健な見解を示している(Searle 1976, 47)。だが、やはり優生主義者サイドに属する論者たちは大なり小なり環境的要因を相対的に過小に評価する傾向があった。これに対し、シドニー・ウェッブなどが環境要因の有意性を訴えているものの、ピグーにとって十分ではなかった。何故なら、ウェッブのような類の反論では環境を軽視する優生学者たちにインパクトを与えることができないからである。「パニット教授とその協力者たちはウェッブ氏の抗弁を承認するであろう。環境状態は、これに直接支配される人々に影響を与え得るということを彼らは気軽に認める。だが、それにも拘わらず彼らは、これらの事情が重要でない、何となれば、それは将来世代の先天的素質に影響を及ぼすことができないので、何ら永続的な結果を齎さないからと主張するのである」(Pigou 1932, 113. 傍点引用者)。これに対して、ピグーは、上記のように環境的要素の持続的・累積的効驗性を積極的にアピールすることで、典型的な優生学的見解を真っ向から牽制したのである。「したがって、後天的素質に作用する

原因と先天的素質に作用する原因との間に、時としてあると想定された種類の根本的な相違は存しないと我々は結論する。この両者は同等の重要性を有する」(Pigou 1932, 116)¹¹⁾。

6. 「ダーウィンの危惧」

ダーウィンは、文明の発達に自然淘汰の働きを抑制し、その限りでは生物学的に望ましくない効果を齎す、と認める。「かくして、文明社会での虚弱な成員はその数を増す。家畜の繁殖に携わってきた者なら誰でも、これが人類にとって大変有害であるに違いないということを疑わない」(Darwin 1871, Vol. 1, 168)。文明の発達、環境改善、福祉政策の充実によって、ダーウィンの危惧(再生産率の相違による人口比悪化)が現実味を帯びてきた時代であり、それが優生学興隆の下地を作ったのであった。そして、これが厚生経済学に対する時代の障壁となったことは冒頭で見たとおりである。したがって、この危惧をどう扱うかで、優生思想との勝敗が決まるといっても過言ではなかったはずである。

先行研究は非常に少ないが、パート&レヴィによれば、マーシャルも同様の危惧を示していた。「上流階級の少産」「貧者の多産」という共通の術語でマーシャルの議論は語られている(Peart and Levy 2003, 278)。マーシャルは、より明示的な優生学的フレーズ「下級の血統よりも晩婚で少産な人口における上級の血統」(Marshall 1920, 169)を用いていた。「医療と衛生の進歩によって、一方では肉体的にも知性的にもひ弱な人々の子供の内、死亡せずに生存し続けるようになる者の数が絶えず増加しているにも拘わらず、最も思慮に富み、活力、企業心および克己心を最もよく持った人々は、晩婚その他の理由で残す子孫の数を制限する傾向があり、いよいよ憂慮すべき事柄が増えてきた」(Marshall 1920, 167-8)¹²⁾。

ピグーが直接参照しているのはヘロンの統計結果¹³⁾だが、彼は、こうした再生産率の相違が何を意味しているかを見極めることが肝要であるとして、慎重な態度を取る。どの程度まで悪となる結果が含まれるかを判断しなくてはなら

ないといい、「低階層の相対的に高い再生産率が必然的に悪い先天的形質の存在比率を意味するのか」「貧者全般の生来の質は富者のそれらよりも悪い、ということは確かなのか」と問う(Pigou 1907, 365).

これに対して、まずピグーは次のように述べる。「この難問に対しては、議論抜きで、肯定でもって答えるべきだと頻繁に決めつけられている。そのような方向性が不当であることに私は完全に同意する」(Pigou 1907, 365). 明らかに当時の優生学特有のイデオロギーから離れていることがよく分かる一文である。しかしながら、問題はそれほど単純でないこともピグーは認識していた。「それにも拘わらず、…貧困と生来の『悪い』質との間にかかなりの程度の相関関係が存在することは、自明でないにしても、あり得そうなことである。何故なら、比較的富裕な人々の間には、常に貧しい環境から立身した人々がおり、その人々は幼時には、今なお依然として貧しいままでいる同輩と共にその貧しい環境を共有したからである」(Pigou 1912, 64). 要するに、貧しい人々の多くは貧しいままで一生を終える一方で、貧しい中から這い上がった者には、それを説明する何らかの資質があったのであり、幼少時に貧しい環境を共有した者たちにはそうした資質がなかったという結論にならざるを得ないということである(つまり、そうした資質の有無⇔経済的繁栄(階級)はある程度確からしいということ)。だが、死活的に重要なことは(3で述べたように)先天的能率の面での優劣が彼の考える内在的価値とは直結しないことである(上記の引用中において、「悪い」にわざわざカッコを付けているのはそのためである)。「これらの生来の特質(original properties)に基づいた(人としての)質(qualities)がどの程度の内在的な善であるかについては、私は懐疑的である」(Pigou 1907, 365. 傍点イタリック)。この一文から改めて分かるように、生来の遺伝的形質と(人間の)質とがピグーにあっては明瞭に分けられており、目指すべき価値すなわち厚生は後者に関わっている。

結局、内在的な善さと社会階層決定に影響す

る能力とを共に考慮した際に、低い階層に誕生する子供は、①内在的な善さに関して劣っている先天的質を持つのか、②富裕層に生まれる子供と比較して、全体としての善に貢献する手段としての能率が劣る先天的質を持つのか(Pigou 1923b, 84).

仮に問題が単に、経済的成功(失敗)が内在的に善い(悪い)質を持っていることの合理的指標か否かであったならば、これに対する答えは明らかに否である。これらの間(経済的成功(社会階層)と内在的善)に必然性は存さない(Pigou 1923b, 84). 既述のように、先天的な能率は内在的善と直結するものではない。

だが、平均的、全体的に、経済的成功が善のための手段としての質の指標を意味しないとはいいい切れない。概して、社会にサービスを提供するのに有効な質を有するものは、経済的に成功する。非常に大雑把で一般的な次元で見れば、社会の善のための手段となる質の有無の指標を経済的成功・不成功と看做することは理に適っているという(Pigou 1923b, 84-5). だが、これは、ピグーにとっては手段的事項であり、直ちに出生比率を変えるべしという優生学的主張に傾くわけではない¹⁴⁾。

ピグーの福祉政策(再分配政策)に関する優生学的懸念(ダーウィンの危惧)に対するレスポンスは次のように要約することができる。人口比率変更(逆選択)による国民の(平均的)質悪化と執拗に繰り返されるが、まずピグーは、「質」は内在的善に直結するものではないと明言。3で見たように、彼によれば、それは手段に過ぎない。たとえ国民の平均的質の後退が事実であるにせよ、厚生増進が究極の規準である以上、慎重な比較考量が不可欠となる。「如何なる政策を取るにせよ、その直接的効果と副次的効果とが対立しないか、もし対立するならば、後者によって相殺されないかどうかを見極めないのは危険である」。「そのような手筈[優生政策]が、道徳観念のあり方、家族の生活等々を阻害することを通じて、遺伝子改良が齎すであろう利益以上に、意識の総体[厚生]を害するであろう」(Pigou 1907, 366)ということに常に警戒する必

要がある。恐らく、現代的な観点からしても、優生思想と政策について最も懸念されることは、育種、人為淘汰に付随する、またはそれによって惹起される別の副次的結果を切り捨ててしまっていることであろう(内井 2002, 127)¹⁵⁾。その点を押さえたビグーのレスポンスの骨子は、明らかに倫理的見地からのものであるが、当時の多くの経済学者らはこの見地を等閑にしたように見える。この辺りの事情を指して、シュンペーターは「イデオロギー的偏見」と述べたのだと考えられる。

こうして、ビグーの倫理的観点(厚生主義)によれば、経済的繁栄、社会階層を決定する先天的能力(知力・体力)はあくまで手段であることから、そうした資質を欠いた者が増えるからといって、直ちに悪いことにはならない。これを悪と看做すのは、手段を偏重するイデオロギー的発想であるというのがビグーの含意であろう。

以上は、倫理的観点からの考察であった。補足として、ビグーは、翻ってこうした懸念が現実的か否かについても一考している。それによると、最下層は経済的考慮とは無関係に再生産しており、再分配政策で改めて増加するのは、それよりも上層(ミドルと最下層との中間層)だけである。その層が増えることは必ずしも平均的国民の質の低下にはつながらない(Pigou 1923b, 90-1)。さらに、ブレンターノの調査結果(Brentano 1910)がある。その調査結果とは、ある階級の繁栄の増進は全体としてその階級の再生産率を高めるよりもむしろ低める傾向があるというものである。よって、分配の平等化は劣等な血統から生まれる子供の割合を増大させるとは限らない、とビグーはいう(Pigou 1932, 121-2)。これは、(たとえ)ビグーの倫理的観点を認めない優生学者たちにも一定の説得力を持つものとなる。

さて、微妙な問題はここからである。ビグーは、「明確な欠陥については、事情は全く異なる」という。「…昔から、多くの医学者が主張してきたように、中度知的障碍、重度知的障碍、梅毒、結核に苦しむ者の出産を当局が防ぐことは、欠陥を持つ人々の長い系譜の源を絶つこと

になる。知的障碍者に関する王立委員会 Royal Commission on the Feeble-Minded は、精神的欠陥に関してこの見解を非常に強く支持している」(Pigou 1912, 54)。もっといえば、ビグー自らこの委員会で、精神障碍者に対しては、1834年の劣等処遇原則を適用することは望ましくないと訴える傍ら、彼らを施設に収容することによる繁殖の抑止、「依存的貧困層」を予防する可能性に言及している(Pigou 1909, 99)。ビグーは、ベートソンを参照し、「幾つかの重大な肉体的、精神的欠陥、…疾病因子、幾つかの形態の悪徳や犯罪は、社会が決断すれば、根絶できる」(Bateson 1909, 305)ことはほぼ間違いないと述べている。「そのような政策は、間違いなく、社会の一般的厚生と経済的厚生の双方を増進させるだろう」(Pigou 1912, 55-6)。この結論こそが、近代生物学が齎した貢献だとビグーは評価する。無論、安易にそれを行うことを是認しているわけではなく、あくまでも欠陥が重大かつ明白な例外的なケースであり、しかも「全うな保護と適切な限定の下」(Pigou 1907, 363)においてである。(総合的な見地から様々な直接・間接効果を勘案した後)場合によってはそのような政策も正当化されることになる。ビグーは、社会改良者が最も役立つことは、民衆の「苦痛の除去」だという(Pigou 1901, 130)。そのために近代生物学の知見を応用しようとしたのであって、それ以上でもそれ以下でもない。

(熟慮を経たにせよ)断種・隔離を認めることは、消極的優生学の陣営に与することになるのであろうか。遺伝的形質の悪化およびそれに伴う国民的質の低下の防止を規準とするのが消極的優生学であると定義するならば、ビグーはその立場にはない。彼自身は、遺伝的形質それ自体ではなく、それによる人々の厚生を規準としていたからである(内在的価値と手段低価値との区別、副次的効果の吟味といった倫理的反省を経た判断)。加えて、背景で見たように、ビグーは優生協会の類には所属していないし、一連の論考において、優生思想家を自己と対立する位置に置いている。さらにいえば、遺伝的な疾病を伴う出産を防止することによって、そう

した苦痛の源泉を絶つことができるというのは、ピグーによれば、当時の多くの医学者らの見解であり、彼も賛同している。これは、優生思想の表明というよりは、医療に携わっている者たちの一般的で常識的な見解であったと解すべきであろう。

最後に、福祉政策と優生学に関連する、シドニー・ウェッブとピグーとの比較を行ってみた。優生学議論に関していえば、ピグーはウェッブに対して終始批判的である。

ウェッブは、環境要因を無効とする過激なタイプの優生思想を批判したが、彼自身は優生学自体を批判したわけではなく、むしろ同調している(Freedman 1979, 656)。ウェッブは1909年の「少数派意見」の趣旨説明を『ユージェニックス・レビュー』に寄稿している。「優生学者として我々がなさねばならないことは、注意深く環境を操作し、生き残った者が最高の資質を持つ存在となるように尽力すること」であるという。しかし、同時に「知的障害者および退化した家系の生殖については、公費を用いてでもこれを防止」しなければならない(Webb 1910, 237-8)。「専門知識を社会的階層秩序の構成原理とみなすその社会観は、プロフェッショナルによる社会計画の賛美と容易に結びつく。『親たる資格(parenthood)』の国家による選別を通じた積極的優生政策の発想はそこから生まれてくるものであり、専門職中間層の社会主義としてのフェビアン主義との接近の理由もここにある。…いずれにせよ、過剰なまでの専門知識と教育を受けた専門人の賛美は、専門職中間層の再生産への懸念と表裏の関係にあった」(重森2007, 4)。

『出生率の低下』(Webb 1907)におけるウェッブの主張は以下のようなものである。ウェッブの見解によると、大部分の者にとって、産児と育児に掛かるコストは深刻である。それ故、血統に対して強力な思慮的チェックが働く。しかも、逆選択的である。思慮深く先見性のある家族の人数が減少する一方で、墮落した者たちは再生産をフルに行行使している。それ故、仮に子を持つことのコストが引き下げられたとすれば、

後者の集団は相変わらずである一方、良い労働者階級はより多くの家族を持つように促されるとウェッブは考える。ウェッブの主張によると、思慮深い者たちに働くチェック(扶養の負担)を取り除かなくてはならない。例えば、子を持つ母親と子に対する無制限の医療的援助に反対する議論は消滅する。全ての職業の中で最も不可欠である「母性」を経済の基礎に据えなくてはならないとウェッブは訴える(Webb 1907, 18-9)。優生学的な見地からすれば、ウェッブの提唱する福祉政策は、相対的に優れた形質を持つ集団の増殖を通じて国民的質の改善を図ろうとする積極的優生政策の一環である。ウェッブが唱えたナショナル・ミニマムも彼のこうした優生思想からその根拠がよく理解できよう。『レッセフェール』政策は、必然的に、優生学者にとって、全ての中で最悪の政策である。何となれば、理性的に意図された選択を明らかに捨て去ることを含意するからである。「ゲームを絶望のうちに諦めない限り、首尾一貫した優生学はレッセフェール個人主義者であり得ない。彼は介入、介入、介入しなくてはならない！」(Webb 1910, 234, 237)

ピグーはウェッブの(積極優生学的)方法には付随的な弊害があることを指摘する。ピグーによれば、このウェッブの計画は無情で報酬目当ての結婚を促すことになる。これは二点において有害である。第一に、(政策によって増加する)子供は、無情で損得勘定の強い親の下に生まれることになる。第二に、そのような経緯で生まれた子供は、同様に無情で損得勘定がむき出しとなった環境で育つことになるというのである(Pigou 1907, 369)。これは明らかに厚生にとってはマイナス要因となる。拙著(山崎2011, Ch. 2)で既に指摘したが、同じくナショナル・ミニマムを訴えたピグーの根拠は、優生学とは無関係である。彼は厚生実現という「拘束性のある人間的義務」(Pigou 1914, 37)から貧者の必要充足(欲求充足ではない)＝ミニマムの絶対性を訴えたが、そこにおいて、人種の質改善ないし育種という観念は存在しない。

7. 結論

ピグーは、育種や人種改良には積極的な関心は持っていなかった。当時発達した生物学の知見を応用する意図は、主に先天的な病気を根絶して、人々の苦痛を除去したいということである。マニフェスト(1908b)にある貧者救済と厚生増進の方針を貫くために、優生学者からの強烈な非難という時代の風潮に対抗して、その目的遂行の妥当性を倫理的見地から示さんとしたものが一連の論考の動機なのである。ピグーの立場は、優生学という原告に対する被告(経済学)弁護人のようなものであろう。

今回、ケンブリッジ優生協会というピグーの優生学議論の背景を垣間見た結果、従来の拙著のピグー解釈を若干修正する必要があるとの結論に至った。つまり、従来は、ピグーは消極的優生学を認める立場にあったと解したが(山崎2011, 216-7)、彼が優生協会類に一切タッチしていない事実や上で見てきた主張を顧みると、積極であろうと消極であろうと、ピグーは端から人種改良には重きを置いていなかったという構図が見えてきた。重大かつ明白な遺伝的疾患を持つ者に対する断種や隔離に賛同したのも(これが表面的には彼が消極的優生学の立場を取ったと解釈される理由)、遺伝的墮落、国民の平均的質墮落の阻止ではなく個人の不幸(苦痛)の除去という側面が念頭に置かれていたためだと解される。一方、当時支配的だったのは、たとえ消極的であったにせよ、知能や体格といったもの(遺伝的形質：ピグーによれば所詮手段的価値)への固執、ないし先天的形質の墮落を認めないという立場であった。根拠が異なるにも拘わらず、「是認した」(Peart and Levy 2003, 263)とする解釈は妥当とはいえないだろう。

何れにせよ、確かにピグーは、優生学に内在するイデオロギーを看破し、優生学的批判から福祉政策(環境を通じた改善：三命題)を理論的に擁護した。「主要命題[三命題]は何れも、生物学的考察によっては覆されない」(Pigou 1912, 65)。こうしたピグー厚生経済学の側面は、従

来全く評価されてこなかった。確かにシュンペーター(ないしレナード・ダーウィンの)指摘は全く妥当であるといわざるを得ず、少なくとも、優生学が最も過激だった時代に、経済学者の立場からその正当性をいち早く主張したのはピグーのみであった。30年代頃までに、優生学自体も環境を重視する改良型優生学(ゴルトンやピアソンの説は廃れていった)へと変わっていくなど、この点でピグーの厚生経済思想は歴史の審判を耐えたのである。

(高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門)

注

※ 本稿作成に当たり、一橋大学経済研究所定例研究会において、討論者の音無通宏氏(中央大学名誉教授)並びにフロアから極めて有益なコメントを頂いた。厚くお礼申し上げたい。

1) サールは次のように述べている。「…『国民的効率』への固執、そして『環境的』社会政策の明らかな失敗に対する落胆は、優生学に対して相当に親和的な政治的雰囲気を作り出した」(Searle 1976, 9)。なお、国民的効率への固執の背景にはボーア戦争によるパニックがあった(Searle 1976, 20)。

2) フリーデンは、「彼ら[啓発された進歩主義者]は、優生学を時折ぼんやりと考え、それに対して好意的に評したり、優生協会での講演を了解したり、協会の会員にすらなる者もいた」として、ケインズを典型例に挙げる(Freedon 1979, 670-1)。ケインズは、ゴルトンのことを、優生学という名の純粋な社会学の一分野、最も重要な一分野を築いた者として賞賛していたとされる。ケインズと優生学に関しては、小峯(2007)を参照。

3) ケンブリッジ優生協会に関する二次的ソースのメインは、Mazumdar(1992, 22-5; 96-105; 142-51)およびMambro(2003)である。その他、Searle(1976)、サール(1976)の文献も役に立つ。

4) この点に関連して、シュンペーターは的確に指摘する。「批判者たちが衝いたのは、ここに関連がある生物学に対してではなく、…むしろ、今日[1950年代辺り]においては使い古された既知の方法で、自然淘汰の概念を社会淘汰の事実に応用すること、生存に寄与する『適性性』を『社会的に望ましい』性質と同一視すること…に対してであった」(Schumpeter 1954, 789-90)。「批判者」として明示されていないが、間違いなくムアが含まれていると見て差し支えない。ピグーもそれに続いているのである。

5) この論文は、元は『ユージェニックス・レビュー』に掲載されたものである(Pigou 1923a)、加筆修正されたものがPigou(1923b)に再録されている。このジャーナルは優生教育協会(後の優生協会)が発刊している定期刊行物である。

6) 優生主義者たちは、「科学の進歩に遅れを取ることが必要と考えており、科学の新しい発見がしばしば彼らの社会的行動を規定したのである」(Kevles 1985, 64)。「歴史を振り返ると、科学者は政治・社会的文脈にあまりに鈍感で、視野の狭い善意から新技術の応用を力説しすぎる傾向があった」(米本ほか 2000, 272-3)。

7) イギリスにおける優生思想は、ミドルクラスのイデオロギーと叙述されることが多い。詳細については Kevles(1986), Searle(1976), Mackenzie(1976)などを参照されたい。例えば、ケヴルズは以下のように述べている。「英米両国の熱心な優生主義者たちは大半が中流と中流の上の階級で、アングロサクソン系の白人であり、圧倒的にプロテスタントが多く、高等教育を受けていた。優生運動の指導者の多くは成り上がりではなく、元々裕福な家の出の人々であり、大半は医師やソーシャルワーカー、聖職者、作家、それに生物学や社会科学の大学の教授などのプロフェッショナルな職に就いていた」(Kevles 1985, 64)。

8) この点に関する詳細な議論については、内井(1996; 1998; 2002)を参照されたい。

9) これは Sidgwick(1907, 382)の分析である。この原理は、各人の善のウェイト評価の不偏性を意味するのであり、各人に等量の善を分配する原理とは異なっている。

10) 「…純生物学的な遺伝理論の発展は、この新理論を例外的な病気だけに適用するのはまったく逆の態度を鼓舞する時代的雰囲気の中にあった。自然科学主義の底にあるのは、単純化された因果論的解釈の偏愛である。こうして世紀交代期には、すべての形質は生殖細胞に由来するはずだという、唯『生殖質的』人間観が漠然と広がっていった。それは、生活環境の改善や教育の効果を否定する主張でもあった」(米本ほか 2000, 20-1)。

11) 結局は、30年代ごろまでに、環境政策を無効とした初期の優生学は徐々に説得力を失い、環境も共に重視する「改良優生学」が主流となっていった。

12) パート&レヴィは、マーシャルを優生思想の持ち主だと考えているようだが、この点についてはさらに詳細な検討が必要であろう。

13) ヘロン(ピアソンの助手)の調査については、Mazumdar(1992, 41-4)参照。

14) ビグーのポイントは、社会階層≒先天的質(能率)の高低≒内在的善、である。だが、パート&レヴィは、ビグーに関して、全て等号で見ている節がある。そうでないならば、ビグー(も含めた新古典派)は三つの主要な優生政策を支持した(Peart and Levy 2003, 263)、とはいえないはずである。

15) 「いまから100年時代をさかのぼると、こういった判断は必ずしも多数の判断ではなかった(一般の科学者も含めて)ことを銘記しなければならない」(内井 2002, 139)。したがって、ビグーの先見性は十分な評価に値する。

参 考 文 献

小峯敦(2007)『ベヴァリッジの経済思想——ケインズたちとの交流』昭和堂。

重森臣広(2007)「英国優生運動の統治レトリック(1)」『政策科学』第14巻第2号, pp. 1-8。

内井惣七(1996)『進化論と倫理』世界思想社。

——— (1998)「ダーウィニズムと倫理」『生物科学』第50巻第2号, pp. 80-96。

——— (2002)『科学の倫理学』丸善。

上宮智之(2007)「F. Y. エッジワース『数理精神科学』と功利主義」『経済学史研究』第49巻第1号, pp. 69-84。

山崎聡(2011)『ビグーの倫理思想と厚生経済学』昭和堂。

米本昌平・松原洋子・櫛島次郎・市野川容孝(2000)『優生学と人間社会』講談社現代新書。

Aldrich, M. (1975) "Capital Theory and Racism: From Laissez-Faire to the Eugenics Movement in the Career of Irving Fisher," *Review of Radical Political Economics*, Vol. 7, No. 3, pp. 33-42.

Bateson, W. (1909) *Mendel's Principles of Heredity*. Cambridge: Cambridge University Press.

Brentano, L. (1910) "The Doctrine of Malthus and the Increase of Population during the Last Decades," *Economic Journal*, Vol. 20, No. 79, pp. 371-393.

Darwin, C. (1871) *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. London: John Murray.

Darwin, L. (1912) "First Steps towards Eugenic Reform," *Eugenics Review*, Vol. 4, No. 1, pp. 26-38.

——— (1916) "Quality not Quantity," *Eugenics Review*, Vol. 8, No. 4, pp. 297-321.

Freedman, M. (1979) "Eugenics and Progressive Thought," *Historical Journal*, Vol. 22, No. 3, pp. 645-671.

Galton, F. (1892) *Hereditary Genius: An Inquiry into Its Laws and Consequences*. London: Macmillan.

Hankins, F. H. (1923) "Individual Differences and Democratic Theory," *Political Science Quarterly*, Vol. 38, No. 3, pp. 388-412.

Kevles, D. J. (1985) *In the Name of Eugenics*. Berkeley: University of California Press.

Lock, R. H. (1911) *Recent Progress in the Study of Variation, Heredity, and Evolution*. 3rd ed. London: J. Murray.

Mackenzie, D. (1976) "Eugenics in Britain," *Social Studies of Science*, Vol. 6, No. 3/4, pp. 499-532.

Mambro, V. (2003) "The University of Cambridge Eugenics Society from 1911-13 and 1930-33 and Reasons for Its Ultimate Demise," *Galton Institute Newsletter*, June/September, <http://tinyurl.com/23o5vml>.

Marshall, A. (1920) *Principles of Economics*. 8th ed. London: Macmillan.

Mazumdar, P. M. H. (1992) *Eugenics, Human Genetics and Human Failings*. London: Routledge.

———, ed. (2007) *The Eugenics Movement: an International Perspective*. London: Routledge.

Moore, G. E. (1903) *Principia Ethica*. Cambridge: Cambridge University Press.

Peart, S. and D. Levy (2003) "Denying Human

- Homogeneity: Eugenics & the Making of Post-Classical Economics," *Journal of the History of Economic Thought*, Vol. 25, No. 3, pp. 261-288.
- Pigou, A. C. (1901) *Robert Browning as a Religious Teacher*. C.J. Clay and Sons.
- (1907) "Social Improvement in the Light of Modern Biology," *Economic Journal*, Vol. 17, No. 67, pp. 358-369.
- (1908a) *The Problem of Theism, and Other Essays*. London: Macmillan.
- (1908b) *Economic Science in Relation to Practice*. London: Macmillan.
- (1909) "The Economic Aspect of the Problem," in *The Problem of the Feeble-minded: An Abstract of the Report of the Royal Commission on the Care and Control of the Feeble-Minded*. London: P. S. King.
- (1912) *Wealth and Welfare*. London: Macmillan.
- (1914) "Some Aspects of the Housing Problems," in Rowntree, B and A. C. Pigou. *Lectures on Housing*. Manchester: Manchester University Press.
- (1922) "The Private Use of Money," *The Contemporary Review*, Vol. 121, pp. 452-460.
- (1923a) "Galton Lecture," *The Eugenics Review*, Vol. 15, No. 1, pp. 305-312.
- (1923b) *Essays in Applied Economics*. London: Frank Cass.
- (1932[1920]) *Economics of Welfare*. 4th [1st] ed. London: Macmillan. 永田清監訳『厚生経済学』全 IV 冊東洋経済新報社, 1953-55 年.
- (1947) *A Study in Public Finance*. 3rd ed. London: Macmillan.
- (1952) *Essays in Economics*. 2nd ed. London: Macmillan.
- Punnett, R. C. (1910) *Mendelism*. 2nd ed. London: Bowes and Bowes.
- Schumpeter, J. A. (1954) *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑 精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』上中下巻 岩波書店, 2005-6 年.
- Searle, G. R. (1976) *Eugenics and Politics in Britain 1900-1914*. Leyden: Noordhoff International Pub.
- Sidgwick, H. (1907) *The Methods of Ethics*. 7th ed. London: Macmillan.
- Webb, S. (1907) *The Decline in the Birth-rate*. London: Fabian Society.
- (1910) "Eugenics and the Poor Law: the Minority Report," *Eugenics Review*, Vol. 2, No. 3, pp. 233-241.